

第1回

カナダ特集

1999年5月26日(水) 13:00～17:00

明治学院

カナダ先住民クリー族出身の劇作家・音楽家・小説家のトムソン・ハイウェイ氏を講師に迎え、独自の世界観を持つ先住民の文化と現代演劇が融合した氏の作品を紹介する。多様な人種と文化を包含し「モザイク・カナダ」とも言われるカナダの芸術の一端を、ネイティブ・カナディアン視点で紹介する。

209

○司会・和田喜夫 本日はご参加下さいまして、まことにありがとうございます。日本演出者協会では、いよいよ国際演劇交流セミナーを始めることとなりました。その第1回が、このカナダ特集です。このセミナーの目的は、〈鎖国のように海外の演劇文化の状況や情報を知ることができない現在の日本の事態を打開したい〉という点にあります。指針として、まず〈近くて、遠い国から始める〉ことと、〈参加費を安く!〉、そして〈戯曲の翻訳リーディングを企画する〉ことなどを挙げました。

幸いこの第1回目に、カナダ先住民クリー族出身の劇作家であり、音楽家であり、小説家でもあるトムソン・ハイウェイ氏をお招きすることができました。明治学院大学の佐藤アヤ子先生のご紹介です。カナダと日本は実は非常に近い関係にありながら、文化的には交流の少ない状態です。また、カナダ先住民の神話は、日本の神話と非常に共通しているようです。

トムソン氏は、1951年のお生まれですが、《白人同化政策》によって欧米の文化に接し、音楽家を目指し、ヨーロッパを放浪し、やがて民族運動に参加し、演劇の道を選ばれました。先住民の現在の思いを演劇化した先駆者・開拓者です。今日はトムソン氏と、演劇や世界についての身近なセミナーとなることを願っています。

では、さっそくトムソン・ハイウェイ氏をご紹介します。通訳は、森百合子さんです。

○**トムソン** (拍手) 初めまして。どうぞよろしく。ごめんなさい。日本語ができません、まだ。(と、日本語であいさつ)

○**通訳** 通訳の必要がなさそうで、失業してしまいそうです。



○**トムソン** 私の言葉でごあいさつ申し上げたいと思います。(クリー語で) こんにちは、皆さん！ 今のがクリー語です。ノイチワーゲンというのは、お友達。単数、1人。ノイチワーゲン・ファクスという、これが大勢のお友達、複数になります。

じゃ、もう一度クリー語で、一緒に。「大勢のお友達、こんにちは！」(笑)

まず、申し上げますが、私は純血のクリー族です。全くまじりっけなしのクリー族です。ですから、私の母国語はクリー語です。第2外国語が英語です。第3外国語がフランス語。

その次が日本語…のはずです(笑)

クリー語は私の母国語ですから、そのクリー族に伝わるストーリー・テリング、お話を伝えるという、その口誦、その伝統についてお話をしたいと思います。

私はカナダのインディアンです。私の属している、私もその1人ですけれども、カナダインディアンの文学、その著作、そしてストーリー・テリングについてお話ししたいと思います。

カナダの私たち先住民の間では、口承の伝統というのはもう本当に何千年も、多分2万5千年ぐらいも遡っていく、それほどの歴史を有しております。クリー語には本来、文字がありませんでした。聞き伝え、口承のものです。私たち先住民が文字にして書くという形になったのは、ここわずか15年ぐらいのことです。なぜそうなったか、それはいろいろ理由がありますが、主なものは1つです。

まず、その1番大きなものは、もう消滅してしまうおそれがあったということです。もともと先住民の言葉は52ありました。それが次の世紀、21世紀にまで生き延びるのは、わずか3つであろうと言われていました。なぜ消滅するかといいますと、これは主として、アメリカ、カナダ、そしてイギリスのテレビの影響です。ただ、私にとって幸いなことは、その生き延びると見られております3つの言語のうちの1つがクリー語です。残る2つはオブジグウエイとイヌイックです。そのイヌイックというのは、皆さん、多分「エスキモー」という名前でご存じだと思いますけれども、イヌイットの人たちの言葉です。

2つ目の理由ですけれども、まず大学教育を受けた、高度の教育を受けた人たち、それがインディアンの中に出てきたということが挙げられます。その高等教育を受けたために、例えば、法律とか、医学とか、ソーシャルワークとか、あるいは文学、そういったところでの修士号とか博士号を取得した人たちが現れてきたわけです。

こうしたいわゆる文字で書かれた文学というものが出てきてからは、わずか15年ではございますけれども、当然のことながら、その後ろには、2万5千年にも上る長い歴史があります。

ただ、ここには私どもの大きな課題がありました。といいますのは、年配の人たち、お年寄りの心の中に眠っていたり、あるいは過去の中に埋もれている、そうしたお話をどうやって集めてくるかということです。

なぜかと申しますと、それは壊されてしまったか、あるいは単に地下に潜って、失っただけかもしれませんけれども、1492年にキリスト教の宣教師の到着によって、それは北米からですけれども、北米にキリスト教の宣教師たちが到着したことによって、お話がみんな消えてしまったわけですから、それを集めるというのが大変だったんです。

これは、もちろん申し上げるまでもなく、コロンブスがアメリカ新大陸に到着した日です。

○**通訳**（通訳の義務ですから訳しますけれども）この年にコロンブスは新大陸に来て、アメリカ大陸を爆破してしまいました！

○**トムソン** ただ、私の住んでおりますカナダの中央部、もう本当に北のところですが、そこはいわゆるキリスト教の宣教師の到来というのが非常におくれまして、1860年にならないと、彼らはやってきませんでした。これはわずか100年前のことです。

ですから、私どもにはまだ希望があるわけです。この作業というのを私は次のように表現しているんです。焼け落ちた図書館の灰の中に座って、そして部分的にだけども、一部焼けてしまったページを集めて、そしてそれを継ぎはぎして何とか形にしていく、そういった作業をやっている。私たちはそれを通じてお話を集めています。

そうしてでき上がったページは、実にすばらしいものです。もう実にすばらしいもので、どんなにすばらしいかといいますと、その理由としてはさまざまなものがあります。

まず、これが比類すべくもない美しい大地から生まれたものであるという、それが挙げられます。想像していただきたいんですけれども、もう数多くの日本が入り込めるほどの広大な地域に、人口といたら、関東圏でいいますと、横浜、千葉、川崎、それと東京を合わせたくらいのわずかな人口がその広大な地域に住んでいる。そういったところを想像していただきたいんです。

それほどの広大な地域が、アメリカとの国境から北極点にまで広がっている。それ

をご想像ください。そこには、50万にもものぼる湖が点在しております。大小20万本にもものぼる川があります。6千キロを超える長さにわたってうねうねと続く山々と、そして途切れることのない森林がそこにはあります。

私が生まれたマニトバの北部、そこはどんなところかお話しいたしましょう。そこは皆さんが川とか池とかそういったところに手をつけてくださると、まだそのままその水を飲むことができるところです。どれほどきれいなところか、心に描いていただきたいんですが、そこでは空気を吸い込むと、それはもう肺を縮ませてしまうのではなくて、肺を大きくしてくれる。そしてその空気というのが、日光を受けてキラキラと輝くんです。

本当に地上の楽園と言いたいくらい美しいところですから、皆さんはもうできるだけ早く、できることなら、今、すぐにも駆け出して行っていただきたいところです。もう、皆さん、望みのままの広い土地がそこにあります（笑）

私はもう本当にお金持ちで、お金をどうやって使っていいのかわからないくらい持っているお金持ちなんです（笑）……ちゃんと起きてらして、私の話を聞いてくださっているか、それでときどきこうやってジョークを入れては、確かめているわけです（爆笑）

このすばらしい国カナダ、その土から、その岩から、その川の流れから、またその湖や山から、この神々の、この神様には男の神様と女の神様とがいますけれども、その自然の力を現しているそういった神様にまつわる話が生まれたのです。

そして、こうした人たち、私自身もその1人ですけれども、その私どもにとりまして最も大事なただ1つのこと、ただ1つのお話、これはキリスト教の宣教師には到底理解できず、またこれからも、今も理解していない話ですけれども、それが私たちにとってどういうものであるかといいますと、この地球、この大地、これは神様、しかも女神、女性、そして母なるものです。その女性というのは、肉と骨と、また脈々と打つ血の流れる血管、そしてきちんと空気が流れ込む肺、そういったものすべてを私たちに与えるそういった神様からできていて、彼女にとっての子供、それは女であり、また男であり、また動物であり、木であり、植物であり、土であり、そして鉱物である。彼女の子供というのはそういったものたちであって、決して機械ではないもの、すべて自然が彼女の子供である、このお話が私たちにとっては最も大事な話なのです。

私たちにとって重要な点、それはこの地球というのは女神、これは女性の神様なんです。男ではありません。私たちの考え方にも、文学にも、私たちの仕事、すべて先住民であるネイティブ・カナディアンアーティスト、その根底に横たわるのが今、申しあげましたような考えです。

では、インディアンとしての生活、暮らしに全く問題がないかといえば、それはう

そになります。じゃ、どんな問題があるかといいますと、もちろん20世紀という時期、もちろんその時代というのは機械の時代であり、テレビの時代であり、コンピューターの時代であるんですけども、これがあまりにも突然に、あまりにも早く訪れたために、私たちがいまだに立ち直れないでいるということがあります。

もちろん、私たちは、仲間の、先ほど申し上げましたようにアーティストの手を借りて、生き延びていこうという決意を持っておりますし、それからこの地球、母なる大地、この地球に対する敬意の念を持ってこそ生き延びられるんだと、次のジェネレーションである私たちの子供たち、あなたの子供たちに何かを伝えていくことができるんだと、それを世界にわからせたいと思っています。

次の世代に伝えたいもの、それが何かと申しますと、それは子供たちが十分に息を吸うことができる大気であり、飲むことができる水であり、また胃がんが襲われて、緩やかな死に見舞われる心配なしに食べられるお米、これを子供たちに伝えていきたいと思っております。

(通訳が眠っちゃったんじゃないかと思って早口でジョーク。会場、爆笑)

最後に、皆様、この美しい、すばらしいこのお部屋、東京のど真ん中であって、本当に素敵なこの劇場でご紹介できることを大変誇りに思っております。カナダ先住民の文学、これをご紹介できることを大変誇りに思います。

では、これで私のトークのほうは終わります、『ドライリップスなんてカプスケイシングに追っ払っちゃえ (Dry Lips Oughta Move To Kapuskasing)』の16ページを読んでみたいと思います。では、私が英語で読んでみます。どんなふうなものか聞いてみてください。

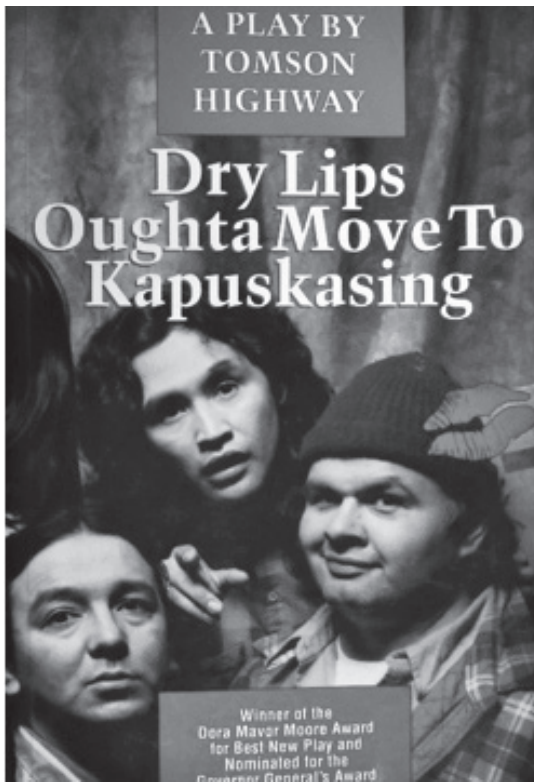
私は非常に早口でしゃべります。私は、口は英語をしゃべるんですが、考えるのはクリー語で考えるんです。クリー語というのは、世界で1番早い言葉でつくられています。日本語よりもはるかに早いんです(笑) 私はもう本当に早く読みますけれども、びっくりなさらないでください。

(トムソン氏、非常に早くしゃべる) 多分、通訳はとでもついてこられなかったと思いますけれども(笑)

カプスカシングというのは日本語読みで、カプスケーシングというのが英語読みですけれども。これは小さな町なんです。オンタリオのうんと北のほうにある小さな町です。非常に小さな町です。もしも皆さんがオンタリオの北のほうに近々行こうとお思いになって、そこに行って、カプスケイシングに行くと言ったら、きっとわかります。もう、追い出されちゃうんじゃないか(笑)

もう一度。(聴衆が原語を合唱する)

よくできました!(笑)



ドライリップス本の表紙

このお話はどういうものか一言で言いますと、《神様がこの世に女性の形で戻ってきた》という設定です。それで、女の神様ですから男どもを「みんな死んじまえ」と脅すわけです。

この本の表紙にキスマークがありますね。女の神様は、この世界、この世にキスをするんです。(トムソン氏、投げキスをする。会場、笑)

先住民の人間が英語で書くときに、どういふふうにやるかといいますと、本当にとんでもないことを考えつく人たちなんです。その思いというのまで英語で表すんですけども、それをクリー語で考えて、クリー語で考えたものもいろいろに練ります。ひねったりさまざま考えています。

例えば、英語で書いたものを、足で考えたようなもの、それも宙に投げてみて、そしてその

中でうんとあれこれひねってみるという。今のは比喩的な言い方ですけども、そのくらいとんでもない、自分で考えたことに対して、それを練っていくといいますか、手を加えていきます。

本当に狂ったくらいおかしいことを考えて、また非常に早く動いていくんです。ですから、覚悟して聞いてください。これはクリー族の考えること、想像、イメージネーション、そしてそこに入っているのはクリーの言葉、リズムも入ってきます。こういった感じですよ。聞いてください。

(クリー語で話す)

クリー語をどういうふうにするかという、今、聞いてくださった感じで使うんです、私たちは。ですから、いわゆる英語、北米の英語という感覚から非常に遠いものです。いわゆる英語が喉から上の音だとすれば、クリー語はお腹の底から、全身の音です。

私はもともとミュージシャンですから、後でピアノを弾いてお聞かせしますが、カナダでは、まるで言葉を、何というんでしょうね、音楽のように扱うんですね。カナダの演劇ではさまざまな要素を使います。その1つがこの音楽で、私は今からこれをお目にかけてたいと思います。といいますのは、私は本来がミュージシャンですから。最初に音楽を勉強しまして、音楽学校に行ったわけで、演劇に転向したときは本当に貧乏でして、自分自身で全部つくっていかなければならなかったんです。プロデュースも誰もやってくれる人はいなかったんです。ですから、私自身でプロデュースしました。

自分の戯曲の公演をプロデュースするときには、全部自分で払わなければならな

いわけですね。それをやっていたもんですから、きょうも一文無しというわけです。きょうは皆さんから、逆に私のほうにいただきたいと思っていたんですけど(笑)これはとっても高い授業のようですね(笑) そうなりますと、私も帰りはうんとお金持ちで帰れますので。

ですから、お金がないということによって、私は何もかも1人でこなさなければならなかったわけです。人を雇うなんてことはできませんから。音楽も自分でつくって、そして自分でそれを演奏するし、それからデザインも自分でするし、とにかくありとあらゆることを全部1人でこなしました。

たまたま、その結果、今度はショーミュージックというのはどうやって書いたらいいかということもそこで身につけました。ですから、ここ15年間は、全部自分で作曲、音楽は自分でやっております。次の私の戯曲はミュージカルでして、全部私の作曲です。その中から1つ、今日は弾くことにいたします。私、歌はだめなんです。

今日は皆様、ここにお越しいただいてありがとうございます、という感謝の気持ちを込めて弾きます。もう、これ以上どなたも私の言葉には耳を傾けてくださらないでしょうから(笑) 通訳以外は(笑)

だからここで弾くことにいたします。

『ドライリップスなんてカブスケイシングに追っ払っちなえ』は、7人の男性が出てくる作品です。最初に書いた作品は、7人の女性が出てくる『居留地姉妹 (Rez Sisters)』という題名でした。7人の女性と男の神様の話でした。それに対しまして、こちらの作品は7人の男性と女神。

次のミュージカルは『ローズ (Rose)』というんですが、7人の女性、7人の男性、これが一緒になって出てきます。歌って、音楽を演奏します。その中の1つをこれから弾くことにいたします。

今日は、私のバンドを連れてこなかったもんですから。それから、歌い手も連れてくるほどお金がなかったもんですから…そして、ダンサーも連れてこられなかったんです(笑) ですから、私1人寂しく弾くことにいたします。

本当にスローで、悲しい曲なんです。皆さん、必ず涙を流して、オンオンと泣かれるんじゃないかと思えます。ぜひクリ넥スティッシュを用意したほうがいいと思えます(笑・拍手)

うんと短いものを弾きます。

(演奏)

